

# 蟻の時代、魚の時代、鳥の時代

研究管理監



八木 行雄

YAGI, Yukio

つくばに帰ってきて3回目の正月を迎えた。七戸、札幌あわせて20年と北国暮らしが長かった身から見ると、雪のない正月はいまひとつ間が抜けたようで落ち着かない。雪で閉ざされた北国では正月休みと言っても選択肢は少なく、腰痛でスキーを諦めた身からすると必然的(?)に温泉三昧か休日出勤の日々となる。落ち着かないのは選択肢が沢山ありすぎるからなのかも知れない。

七戸に赴任して間もない頃、巷で津軽出身の吉幾三の「俺ら東京さ行くだ」という曲が流行っていた。かつての地域のものなさを自虐的に歌った曲で、カラオケで替え歌にして支所暮らしの憂さをよくはらしていた。実際、当時の(今はそんなことはないが)支場の研究環境は曲がりなりにも立派とは言えず、生化学機器に至っては県の家畜保健衛生所の方がはるかに充実していた。直接の指導者も無く、研究費も僅かだった。ただ、野外材料だけは潤沢で夏は石倉山(七戸町営)、横沢山(上北町営)の放牧地、冬は横浜町、田子町の農協の哺育センターに行っては小型ピロプラズマ病や牛の下痢・肺炎の材料集めに勤しんでいた。野外に行くと「獣疫」の先生と言うことで歓迎されたが、何一つまともに出来ない若輩の身としてはその度に心苦しい気持ちで一杯になった。時間だけはふんだんにあったものだから、論文を山のように読み、山のように実験をして、山のように失敗した。今思うと若気の至りで焦って実験計画そのものに無理があるものが多く、支場や農家の方々に多大の迷惑をおかけした。ケニアで3年過ごした後、二度目の支場となった札幌には、「同じ轍」は踏むまいと誓って行ったものの、今思い返せ

ば七戸同様に関係者には多大の迷惑をおかけした。この場をかりてお詫びしたい。

ところで、一昨年他界されたが有機農法の提唱者として有名な北海道中央農試元場長の相馬暁氏は、研究者の一生を動物になぞらえ、「蟻の時代、魚の時代、鳥の時代」と称している。30歳までは圃場に毎日出て、落ちている財産を見つける時代。丁度、蟻のように地面を這い石にぶつかりながら自分の知識と経験とデータを集める時代。35~40歳は溪流で岩を避けながら泳ぐ魚のように、隣そのまた隣の人と連携しながら仕事をする時代。40歳以降は鳥の時代で地上から離れ空から空間的に全体を概観すること、自分なりの農業観、哲学をもち後輩を指導する時代と述べている。研究には個人差や環境、或いは専門性があることから氏の述べている年齢が必ずしも最適とは言えないかも知れないが、研究員の一生を、またあるべき姿を示していると思えば座右の銘にしている。少なくとも自分にとって七戸時代は蟻の時代であったと思っている。もっともその後、魚や鳥になれたのか、或いは羽蟻となって舞い上がったのかは明らかではないが。

動衛研では昨年4月に大幅な組織改編が行われ、部・研究室制から研究チーム制に移行した。従来、研究室単位で培ってきた専門研究の伝承を危惧する声も依然聞こえてくる。しかし、動衛研が動物を衛るという「使命」をもった研究所であり続ける限り、またそれぞれの部署で「蟻」や「魚」や「鳥」が「使命」達成に向けそれぞれの役割を担って行く限り、杞憂に終わると確信している。我々の「使命」は重いのである。